いう名称に替わって，「伝統医学」という微温的な呼称が用いられるようになった（p. 276）。「市場経済」的に，一般の人びとのニーズにこたえて，「東医」への「回帰」が進行した（pp. 213, 277, 287）。本書の文脈に沿うならば，「北」ベトナムの「南」ベトナム「回帰」ということになるのだろうか。

それでも現在のベトナムは，「伝統医学」と西洋医学＝「現代医学」の「統合」を目指すという国是を捨てたわけではなく，伝統医学専門職の養成が続けられており，第5章，「『伝統医学』教育と医師養成―理論化の困難と創造される実践」では，養成現場の密着取材がおこなわれ，その教育内容が詳しく紹介されている。現代科学になかなかなじみそうにない伝統医療のありように医学生がとまどっている様子なども紹介されていて，興味深く，現場の声がよく聞こえてくる内容になっている。

専門雑誌に掲載された複数の論文をまとめて博士論文とし，さらにそれを大幅に改稿したのが本書である，とあとがきにあるが，全体のまとまりがよいとはけっして言えない。すでに指摘したことだが，「南薬」文化の担い手とされる少数民族の扱いがおざなりであり，さらに「南部」の「東医」においては「宗教団体」が「大きな存在」だったとあるが（p. 193），それもほとんど説明がない。著者は現代ベトナムでの伝統医療について精力的なフィールドワークをおこなっている。そのような医療人類学的な視座とベトナム政治史の視座とを融合させ，さらに「一般」読者向けの「サーヴィス」にも心掛ける。まだ若い研究者。今後，そのような点を念頭に研究されることを期待したい。

（見市雅俊・中央大学名誉教授）

布野修司．『スラバヤ　東南アジア都市の起源・形成・変容・転成――コスモスとしてのカンポン』京都大学学術出版会，2021，xvii+583p.

タイトルから本書を単なるスラバヤの都市史と誤解してはいけない。たしかに著者は，インドネシア第二の都市スラバヤで「都市の中のムラ」とも形容される都市内の自然発生的な集落であるカンポンを，日本の建築分野ではじめて本格的に研究した人物である。だが，本書の射程はスラバヤやカンポンを優に超えている。むしろ本書は，建築学者としての著者の半生が丸ごと詰まっているといってよい。

インドネシアでカンポン[1]を研究する評者からすれば，著者の背中は常に追うべき存在である。しかし，追いつこうにもその背中がいつも遠くに霞んでしまうのは，著者の研究対象が常に拡張を続けるからだ。博士論文をもとにした『カンポンの世界』（パルコ出版）を1991年に出版した後，2000年代には『近代世界システムと植民都市』（2005），『曼荼羅都市』（2006），『ムガル都市』（2008），『大元都市』（2015，いずれも京都大学学術出版会）と大著を立て続けに出版する。それらは，植民都市，ヒンドゥー都市，イスラーム都市，中国都城と，それぞれ異なる都市類型を詳細に解剖した非常にスケールの大きな研究である。

しかも，その研究はすべてスラバヤに端を発している。まず，スラバヤ生誕の日は，ジャワ最後のヒンドゥー王国であるマジャパヒト王国によるモンゴル軍撃退の日とされる。そして15世紀にはジャワの沿岸都市として早くもイスラーム・ネットワークに組み込まれる。さらに17世紀にはオランダ東インド会社の進出を受け，以後，植民都市へと徐々に変容していく。日本占領期を経て，インドネシアは独立に至るが，スラバヤでその画期となったのは1945年11月10日の独立闘争である。そして独立後のスラバヤは，増え続ける人口を大量のカンポンが支える巨大都市へと変貌した。つまり先の都市類型すべてにつながるキーワードがスラバヤの歴史に含まれている。この拡張力が著者の真骨頂だろう。

そもそも著者の出自は建築計画学であって都市史ではない。51C型という住宅公団の標準形平面を開発した吉武泰水や鈴木成文らの下で1970年代に学んだ。いわば住まいの未来を考究していた人物が歴史へと関心を広げたのである。だが，それ

1) インドネシア語に倣えばカンプンの表記が適切かもしれないが，ここではカンポンで統一する。

はきわめて自然なことでもあった。1979年にインドネシアではじめて出会ったカンポンに著者が魅了されたのは，そのような背景を持っていたからこそだ。それは以下の理由による。

戦後，建築計画学が取り組んできたことは，さまざまな実例から「食寝分離」など現代の暮らしの原則を導き出し，それらを満たす最適な住宅モデルを考案して供給することであった。都市住宅の不足を，公が規範を示しながら補っていくスタイルである。

他方，カンポンはそのような計画的供給とは正反対の存在である。公による住宅供給が十分に機能しないのを，民によるボトムアップの自発的な建設が補完した。それが著者を驚かせた。というのも，カンポンは標準化がもたらす画一化とは無縁だったからだ。しかも人々の暮らしは住居単体に収まらず，近隣にまで広がる。住宅建設も相互扶助など地域住民のつながりでなされる。住居単体で住まいが成り立っているのではなく，住居の集合が住まいを支えているのだ。「(51C型は）住居集合の全体を問題にしてこなかった」(p. 480)と批評的に著者は述べているとおり，従来の住まいの計画学に何から何まで問い直しを迫るのがカンポンだったわけである。

そこから本書の研究が生まれた。スラバヤのカンポンをきっかけに，まずは住居から住居の集合へと関心を広げ，そこからスラバヤ全体を捉える都市の視点へと飛翔した。さらに今度はスラバヤという都市の原理をたどるべく，歴史へと深く潜っていった。それが著者の軌跡である。

以上のように著者の軌跡をここで改めて紹介したのは，それを把握していると，本書の構成が理解しやすくなるからである。それでは本書の構成に話を移そう。

本書は以下の4章に序と結が加わる。

第1章　スロとボヨ
第2章　スナン・アンペル
第3章　オランダ
第4章　スラバヤ11月10日

そして各章の副題として「起源」「形成」「変容」「転成」がそれぞれ付く。つまり，各時代のスラバヤを象徴する伝説，人物，国家，出来事をタイトルに，スラバヤの起源から転成までを描く構成をとる。主軸はスラバヤ史であり，本書のタイトルどおりである。

だが，各章には本論とはやや独立した形でSpace FormationとCascadeと名付けられたパートが挿入される。Space Formationとは，空間や都市形態，建築の観点からスラバヤさらには東南アジアの都市の起源・形成・変容・転成を述べるパートである。本論が「時間―歴史」なら，Space Formationは「空間―形態」だと著者は位置づけている（p. 6)。具体的には，第1章ではデサ（村落）について，第2章ではアルン・アルン（都市核）について，第3章ではヘメーンテ（自治体）について，第4章ではカンポン（都市村落）について取り上げる。

他方Cascadeは，スラバヤの歴史を東南アジア史や世界史などのより広い文脈に位置づけるためのパートである。ジャワのインド化，モンゴルの侵攻，イスラーム・ネットワーク，植民都市，51C型などについての説明である。これらはスラバヤが同時代の他の都市の現象とどのように関連しているのかを示すいわば巨大な注釈である。スラバヤの出来事を単なるスラバヤの事象として終わらせるのではなく，世界史として描くための工夫である。

すなわち本書は，スラバヤの歴史を軸にしながら，建築や都市空間，形態論を語るとともに，スラバヤの歴史を東南アジア史，世界史に接続する。スラバヤに関連する建築や都市史，東南アジア史，世界史をすべて詰め込むような野心的な構成をとる。それは著者の研究の軌跡の現れでもある。

だが，Space FormationやCascadeが本論を凌駕してしまっているがゆえに，スラバヤの都市史を期待して本書を手にした読者は，やや迷路に入り込んでしまうかもしれない。その時は，上述した著者の歩みが結にまとめられているので，それを先に読むことで本書の羅針盤を得るだろう。

以上のとおり，各章は本論／Space Formation／Cascadeの3つが入り組んだ構成をとる。そのため，各章の内容をここで簡潔にまとめることはとてもできない。その代わりとして本稿では，著者の専

門性が発揮されたSpace Formationを中心に各章の要点を評者なりに整理したい。

第1章はスラバヤの前史が主題である。そのため，ジャワのインド化を本論では扱い，Space Formationではカンポンの起源にあたる村落を扱う。その中で，村落を意味する用語であるデサ・カルラハン・カンポンの関係を整理した箇所は学ぶところが多い。村落の呼称は，ジャワではデサ，スンダではカルラハンが使われ，さらにスンダではカルラハンを構成する居住のまとまりをカンポンと呼ぶという。また，空間的にはジャワのデサは囲い込みがあって領域性が強いのに対して，カルラハンは囲い込みのない領域性の弱い村落形態だと指摘する。つまり，カンポンはカルラハンの一部であり，カルラハンも自己完結した領域ではない。したがって，カンポンにしてもカルラハンにしてもそれらで表現される村落は，デサと比べると全体の一部としての性格が強いといえる。現在，都市部では最小の行政区を指す用語はカルラハンと同根のクルラハンであり，カンポンは都市内の居住地を指す。すなわち，クルラハンとカンポンは共に都市を構成する部分集合を指す用語であり，それがスンダの村落表現と矛盾なくつながっている点は興味深い。

第2章はスラバヤへのイスラーム・ネットワークの浸透が主題である。そのため，Space Formationではジャワ・イスラーム都市の空間構造を扱う。その特徴は，王宮やモスクがアルン・アルン（広場）を囲む構造にあるが，現在のスラバヤにその痕跡はない。しかし，既往研究や古地図，地名などから，アルン・アルンを中心とする類似の空間構造が17世紀以前のスラバヤに存在していた可能性を本書は提示している。その痕跡はたしかにいまでは消えてしまっているが，例えば同地区には英雄記念塔の広場があり，正確な位置は異なるが，アルン・アルンのような都市の中核をなす広場が時代を超えて出現しているのに何らかの因果を感じずにはいられなかった。

第3章は，17世紀にはじまるオランダ東インド会社の支配からインドネシアの独立までのスラバヤを描く。ただしSpace Formationでは，18世紀の都市空間を第2章で扱っているため，本章は1825年以降の近代植民都市への変容に焦点が絞られている。植民地期の地図や建築図面が豊富に残り，既往研究も充実しているこの時代とあり，鉄道や港湾などのインフラ開発から蘭印の建築家による個別の作品に至るまで，インフラから建築までの重要事項が余すところなく取り上げられている。一時はバタヴィアを凌いだスラバヤだけあり，バタヴィアの都市開発とシンクロするところも多い。20世紀前半の蘭印の都市や建築を学ぶ上で貴重な章である。

第4章は独立以後のスラバヤが主題である。したがってSpace Formationは，著者がおよそ40年にわたって研究，観察してきたカンポンを重点的に扱う。ナショナリズムの誕生から独立，スカルノ，スハルト体制を経て現在に至るこの時期の都市史にやはりカンポンは欠かせない。政府の都市計画や住宅政策だけでは，スラバヤなどのインドネシアの大都市は機能不全に陥っていたに違いないからだ。公の規制が弱い中で，民衆の自発的な建設によって広がったカンポンが住宅の不足を補った。カンポンは計画があって建設があるというプロセスを踏んでいない。にもかかわらず居住地が自由さと秩序を保ちながらいかに形成され，変容し続けているのか。実地調査の豊富な成果をもとに，カンポンの街区構造や住宅の増改築プロセスをもとに解明する。本書には所々にQRコードが付されているが，本章のそれにアクセスすると，臨場感あふれる現地のカンポンの様子を視聴できるのもありがたい。

カンポン形成の仕組みと並行して，カンポンの知見を都市計画や建築計画がいかに吸収してきたかも本章では述べられている。例えば，既存のカンポンを撤去することなく公的な資金を投入してそれを改善するカンポン・インプルーブメント・プログラム（KIP）やカンポンの空間構成に学んだルスン（公共集合住宅）の開発，著者らが提案したスラバヤ・エコハウスなどが取り上げられている。カンポンに建築計画学の希望を見た著者ならではの切り口だろう。

以上，各章のSpace Formationを駆け足で見てきたが，空間や形態と結びつけてスラバヤを語るところに，やはり読者は多くの学びを得るに違いな

い。本書をとおして空間や形態の視点が東南アジア研究に挿入されることで，東南アジア研究に一層の広がりがもたらされるだろう。だからこそというべきか，Space Formationがやや付加的な扱いなのは残念である。むしろそれが本論となる構成もありえたのではないだろうか。

とりわけ，カンポンの特性やカンポンを取り巻く政策を取り上げた第4章は大変貴重である。著者の40年自体がカンポンのアーカイブでもあるからだ。しかしその一方で，本書ではカンポンがトップダウンの政策や計画に対してやや二項対立的に位置づけられているのは気になるところだ。著者自身が第4章で示したとおり，KIPやルスンにはボトムアップの取り組みを吸い上げたところがある。ただし，ボトムアップ的といわれるKIPでも，実際の工事は自治体から派遣された労働者で，住民参加とは言いがたい事例もジャカルタではしばしば耳にする。つまり両者の関係は複雑だ。カンポンを公権力のオルタナティブと位置づけてばかりもいられない。

さらに言えば，標準化や住宅政策からカンポンが遊離しているわけでもない。インドネシアの公共事業省や国営住宅公社（プルムナス）は，日本と同様に戦後に間取りの標準化を試みたが，著者が記録しているカンポンの住宅の間取りにはそれらとの類似が見られる。また，インドネシア政府が考案した間取りは，植民地期のオランダの官舎や労働者長屋などとの共通性が高い。植民地支配と戦後の庶民住宅とを切り離すこともできないだろう。例えば評者は，恒久住宅と呼ばれるレンガやコンクリートブロックなどの不燃材料を用いた住宅が，オランダ時代を起源として現在まで政府によって推奨されてきたことを指摘したことがあるが［林 2016］，大都市のカンポンの住宅はいまではほとんどが恒久住宅である。強い規制がなくとも，政府による標準化や植民地支配がもたらした住宅の価値体系はカンポンにまで浸透している。あるいは逆に，カンポンがそれらを飼い慣らしているといった方がよいかもしれない。そのような現象が生じるのは，カンポンに住む人々が，例えば労働者としてはフォーマルな建設現場にも接続する存在だったからではないかと評者は見ている。著者はコスモスとしてのカンポンという表現をするが，カンポンを閉じた宇宙と見ない視点も重要だろう。

本書で著者は，40年の時を経て，カンポンにはすでに居住歴の長い住民が増え，カンポンを地元とする世帯の割合も大きくなっていると指摘する。もちろんこれまでカンポンの撤去は各地で起こってきたが，それでもKIPなどの効果もあってかカンポンは数多く残存し，その結果，ある意味で成熟したコミュニティが形成されつつあるのかもしれない。その変化は今後スラバヤ，あるいはインドネシアの都市にどのような影響を与えるのだろうか。著者の歩いたカンポンを今度は読者が歩きながら，その行方を観察する機会を本書は与えてくれる。

ところで，全体をとおして誤字脱字が散見された。本書の副題にある「転成」が，第4章のタイトルでは「転生」になっているなど，気になる人も多いのではないだろうか。大著であるだけにそれで評価を落としてしまうのは勿体ない。インドネシアの都市や建築についてここまで包括的にまとめた日本語の文献はないのだから。

本書を読んで，やはり著者の背中は遠くに霞むばかりである。だが，それでもなおそれを追って，何か新しい1ページを書き加えていきたいと思わせてくれる書籍である。

（林　憲吾・東京大学生産技術研究所）

参考文献

林　憲吾．2016.「序列化する建材――インドネシアの恒久住宅」『衝突と変奏のジャスティス』（相関地域研究3）谷川竜一；原正一郎；林行夫；柳澤雅之（編），161–185ページ所収．東京：青弓社.